

2025年

介護保険が危ない

2025年となり早くも2月を迎えました。今年はいわゆる2035年問題まであと10年という節目(勝負の10年)の年です。2035年問題とは、団塊の世代が85歳を超え、人口における高齢者は3割以上となり、介護現場での人材不足や現役世代の減少による経済の縮小など、さまざまな社会問題が表面化すると予測されています。

厚生労働省は昨年12月23日に介護保険制度の見直しを議論する社会保障審議会・介護保険部会を開催し、次の2027年度の制度改正に向けた議論を開始しました。厚労省は審議会で、2025年1月に新たな検討会を立ち上げるとの意向を明らかにし、2040年を見据えたサ



ービス提供体制のあり方を集中的に議論すると言われています。更に25日の閣僚折衝で、27年度の介護保険改正に向けて、2割の自己負担者を拡大、さらにケアマネジメントの一定額の自己負担(ケアマネジャーに対する支払い)を徴収すること、軽度者(要支援1・2・要介護1)の生活援助を市町村の地域支援事業に移すことなどを議題に上げ検討していくことを確認しました。これらは今まで何度も財務省が実現を求めている施策です。財務省としては、介護費用の膨張や現役世代の負担増を抑制し、制度の持続可能性を確保したいとの狙いがあります。

しかし、こうした政策が実現すると介護現場では大きな混乱が予想されます。

例年通りであれば2025年末に報告書をまとめ、政府はこれをもとに2026年国会に介護保険法などの改正案を提出することになります。

いずれにしても今年は今後の日本の介護をめぐり重大な意味を持つ一年になることには間違いはありません。今後の動きを注視していきましょう。

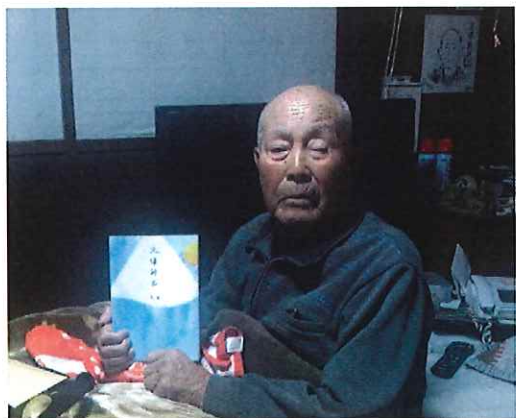
句集を発行

99歳の久保さん

熊野市飛鳥町の久保妙徳さんは99歳迎え、昨年12月に句集「久保妙石」を発行しました。「妙石」は久保妙徳さんの俳号です。

今回の句集については本人も知らないうちに、孫の早絵さんが編集・デザイン・発行を行い、祖父の久保さんにプレゼントしたものでした。

久保さんが属する小阪句会は、昭和24年12月、戦後間もない時期に発足し、久保さんも初めから小阪句会に参加されています。



利用者の作品

絵手紙



熊野市
森本道子さん

水墨画



新宮市
大坂和子さん

書



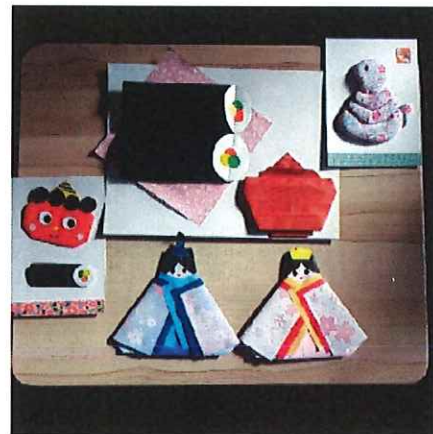
熊野市
大江吉郎さん

毛糸の靴下



新宮市
竹中美智子さん

作品



新宮市
大野千代さん

俳句

草花も
枯れて今は
寒かろう

御浜町
東きり子さん

初めての
浦島エスカレーター
ビックリ仰天

四季のたより

ここ那智勝浦町ゆかし潟には冬鳥として、大陸北部から飛来する少数のヒドリ鴨と住人のガモが仲良く暮らしています。

ゆかし潟の湖面を渡る水鳥。水を切りスイトと進んで、小さな波を起こし、水面を滑るように波紋が広がり、一羽が動き出すと、群れの水鳥が追従してきます。

一羽が飛び立つと、にわかに騒がしくなり、次々と飛び立つ。しばらく湖面を舞い、水面に滑るように着水し、静かに湖面を渡っています。

こんな風景も、後しばらく・・・

